

4 泌尿器科領域の感染症患者における 補中益気湯の使用状況

神戸大学大学院医学研究科腎泌尿器科学分野

重村 克巳、梁 英敏、前田 光毅、中野 雄造
藤澤 正人

【背景】

近年泌尿器科領域においても漢方薬の占める役割が大きくなってきつつある。その背景には高齢化社会や時代の変遷に伴う社会の複雑化などが考えられ、所謂“慢性疲労”の状態の患者さんが多いともいえる。今回我々は主に疲労感を伴う感染症患者における、補中益気湯の使用状況について後方視的に調査・検討を行ったので、報告する。

【対象と方法】

最近3年間において神戸大学医学部附属病院泌尿器科慢性疲労を伴う、男性不妊症以外の患者で補中益気湯を内服している患者とした。検討項目として、年齢、性別、疾患、基礎疾患、症状、処置（カテーテル留置など）、PSA値、前立腺容量、残尿量、内服薬、画像診断の有無、受診前の投与抗菌薬、投与抗菌薬、膿尿、血尿の有無、尿培養検査所見とした。

【結果】

合計で11人の患者が感染症患者であった。そのうち内訳は男性7人、女性4人であった。年齢は35-97(中央値 72)歳、感染症疾患としての内訳は慢性前立腺炎が6人、慢性膀胱炎が5人であった。基礎疾患としては腎盂腎炎2人、尿路結石2人、急性前立腺炎1人、子宮体癌 1人、淋菌性尿道炎 1人、狭心症 1人、糖尿病 1人(重複あり)、なし 2人であった。さらに主訴としては会陰部違和感 2人、頻尿 2人、尿混濁 2人、会陰部痛 1人、排尿時痛 1人、下腹部違和感 1人、陰茎部痛 1人、睾丸痛 1人であった。男性においてPSA 0.047-2.704 (中央値 0.636) ng/mlであり、残尿量 0-30 (中央値 0) mlであった。排尿に関する内服薬はウラピジル 3人、オオウメガサソウエキス・ハコヤナギエキス配合剤 2人、シロドシン1人、デュタステリド1人、タダラフィル1人、ナフトピジル1人、フェソテロジン1人、イミダフェナシン1人(重複含む)であった。投与抗菌薬としては、レボフロキサシン3人、ミノサイクリン2人、ファロペネム1人、アジスロマイシン1人、シタフロキサシン1人、セフトラム1人、ノルフロキサシン1人、セフポドキシム1人、ST合剤1人、キノロン(詳細不明)1人、なし3人(重複含む)であった。膿尿は6人に認め、血尿も5人に認めた。尿培養では大腸菌を4人、緑膿菌を1人に認めた。

【結論】

慢性尿路性器感染症での疲労感など症状緩和目的に補中益気湯が使用されていた。

今後さらに症例を積み重ねてその効果の検討を続けていきたい。